



Title	<図書紹介>前久夫著「京が残す先賢の住まい」京都新聞社(1989-7月初版)
Author(s)	向井, 正也
Citation	デザイン理論. 1989, 28, p. 115-118
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52683">https://doi.org/10.18910/52683</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 図書紹介

前 久夫著

### 「京が残す —— 先賢の住まい」

京都新聞社（1989－7月初版）

わが国最大の古都であると同時に、巨大都市として唯一の非戦災都市でもある京都には、文化財としての無数の古社寺のストックがあるが、一方で、おびただしい数の戦前の文化財的な邸宅が遺されていることになかなか気がつかぬものである。そして、そうした邸宅が、明治以来何らかの形で、わが国近代化の歴史の上で偉大な足跡を残した各界の文化財的な巨人たちの遺邸であることに思い到るとき、これら〈人と住まい〉のかかわり合いに光をあてることの意義が今更のように痛感せられる。といったわけで、そうした点に注目して、これをよみものにしようと考えた何よりもその発想のユニークさにまず敬意を表したい。

本書は、同じタイトルで、京都新聞の夕刊に50回にわたって連載されたもので、「このシリーズの起案者であり、また当時文化部のデスクとしてこれを担当されたのは、現在湖西支局長の津田潤一郎氏だった」と著者は「あとがき」でのべている。だが起案者もさることながら、こんな特殊なテーマをこなせるのも、著者のように、美学美術史と建築史専攻の他に建築設計をもこなすという二足三足のわらじばきならではのことと思われる。

昭和61年7月半ばから2年以上にもわたる連載中、筆者も欠かさず愛読したものだが、今度単行本になったのを見ると、新聞とは格段によくなっているのに気が付いた。紙質がよいことは勿論、そのため活字や写真印刷が見違えるほど鮮明だし、写真にしても、新聞では各々2枚ぱっきりだったのが、倍以上にも追加されることで、ほど全容をつかめるようになった上、さらに巻末には新たに註までつけ加えられている。タイトルのワキに邸の所番地が示されているのも気の効いた配慮だと思う。

当初著者はこのシリーズのために「学者、思想家、芸術家、政治家など、京都が生んだ文化人の遺邸を、近代に限っても、150余件もリストアップした」というが、その中からえらばれた50の邸宅の中で、圧倒的多数を占めるのは、やはり芸術家（27）（カッコ内は邸の数、以下同じ）で、ついで学者（12）、政治家（5）、思想家（2）、その他（4）となっている。芸術家の内訳は、さすが京都だけあって、日本画（10）、つづいて工芸（8）、洋画（4）、その他となっている。

日本画は、古いところでは富岡鉄斎や田能村直入などから、上村松園、橋本関雪、さらに堂本印象、富田溪仙、西山翠嶂、楠原紫峰などが名を連ねているし、工芸では富本憲吉、清水六兵衛、河井寛次郎、楠部弥式といった陶芸の大家をはじめとして染織の小合友之助や稻垣稔次郎、木工の黒田辰秋、図案の神坂雪佳、七宝の並河靖之など錚々たる顔ぶれである。

洋画は太田喜二郎、黒田重太郎、川端弥之助、伊庭伝治郎の4人だけ。いろいろ事情もあつただろうが、京都の洋画界の長老として著名な浅井忠や庵子木猛郎、それに近くは須田国太郎などの名が見当たらないのは淋しい気がする。

学者については、ノーベル賞の湯川秀樹や2人の元京大総長、滝川幸辰と羽田享をはじめとして、京大系が大半を占めている。インクラインの設計で有名な土木の田辺朔郎、「広辞苑」の新村出、西洋古典学の田中秀央等々。すべて、その道の権威のオンパレードである。

デザイン関係の学者では、名著「くいき」の構造で有名な九鬼周造や、建築史の草分け天沼俊一、それに著者にとっての師匠筋に当る美術史の上野昭夫、さらにこれまた著者の建築の師匠だった増田友也など。

次に政界筋では、超大物級の明治の元勲山県有朋（無鄰庵）（カッコ内は邸の名称、以下同じ）、或は元老西園寺公望（清風荘）、悲劇の宰相近衛文麿（虎山荘）等。特に前2者は、巻頭をカラーで飾り、広大な庭園は国の「名勝」に指定されるなど、その貴族的な洗練性や段ちがいなスケールの大きさは、一般の先賢たちの「町の住まい」群とはバランスを失い、やや場ちがいの感もあるが、「町の住まい」とはいうものの、本書に出てくる「住まい」とは、敷地300坪～、建坪100坪～といった調子の、およそ現代の庶民感覚からはかけ離れた性質のものが一般的ではあるのだが。

とはいいうものの、こうしたスーパークラスの大邸宅は、以上その他にもなくはない。有名な橋本関雪の白沙村荘とか「その他」に類別される大河内伝次郎の大河内山荘などは、その敷地面積だけでも前者は約3000坪、後者はさらにその2倍いに近いというから、その他はおしてしるべである。これも「その他」に入る文豪、谷崎潤一郎の下鴨泉川の瀬瀬亭せんかんなども規模の点ではそれほどではないが、（敷地約600坪）かねて聞き及ぶその大名のようなくらしぶりの優雅さ加減は以上の諸例にまさるともおとらぬものだったようだ。

ほんのわずかの例外を除いて、ここでの邸はほとんどすべて戦前のもので、特に明治、大正のものがその半ばに及ぶ。昭和時代のものも大正におとらぬほどの数で、その他はわずかではあるが江戸時代のもの（西園寺公望、清水六兵衛、重森三玲の各邸等）も残っている反面、たったの2つ、戦後のものも入っている。これは富本憲吉と楠部弥式という、どちらも陶芸家の新邸で、ともに山科在であることは、戦後の清水焼団地の創設と無縁ではあるまい。いずれにしても両巨匠の終のすみかとなった「別邸」であった。

ところで、一がいに先賢の住まいといつても、本書の中には実にいろいろの名称をもつた

住まいが目次欄をにぎわせている。そのうち、○○庵だの△△荘など固有名のものを除くならば次のようである。遺邸（20）（カッコ内は戸数、以下同じ）旧邸（10）アトリエ、画室（4）、別邸（2）、寓居（2）、その他は各々1戸づつの、実験住宅（本野精吾）、「住宅」（太田喜二郎）、記念館（河井寛次郎）山荘（大河内伝次郎）である。なお固有名の住まいの中で特に型やぶりのものは湯川秀樹が自ら命名したという「レザビドロ静処」であろう。

こうした住まいのよび名で、気になることは、「旧邸」と「遺邸」の区別である。双方を一括して、旧邸でもいいし遺邸でもいいのではと愚考するが、そのあたりの区別を著者はどう考えているのだろうか。どうやら主人公の死後、年月の経過の著しいものを旧邸と呼んだかのようにも思われる。一方遺邸という名称は、ここで最もひんぱんに使われているが、これも考え方で、故人の住んだことのある家なら、ことごとく遺邸と呼んでいい理屈だと思うが、それでは何か大切なものが欠落する感じもある。終のすみかとなった家が遺邸と呼ぶに最もふさわしいと思われるが、考えようによつては主人公が何らかの意味でふかく関わり合いを持ったり、心を残したりしたすまい空間のたぐいは、たとえそれが旧居であろうと寓居であろうと、遺邸と呼んでいいのではなかろうか。

これら住まいの中には偉大な主人公たちの仕事場を兼ねたものがかなり多い。会議室から研究室、書斎、アトリエ、工房などといったものだが、こうした空間は何らかの意味で一つのメモリアルホールという象徴的な性格を持つものとして貴重な文化財的存在であろう。それらの多くは、遺族はもとより、たとえ住み手が変わった場合ですらも、今なおてい重な保護、保全の手が加えられていたり、将来記念館にする計画があつたり、中には河合寛次郎邸のように既に記念館になっているものもあるといった風で、さすがは京都だけのことはあると思った。それにつけても、「京が残す」とはよくぞいったものである。「京に残る」ではなく、「京都が残した」のであって、この本邦唯一の文化的風土ならではのことと思われる。

「このシリーズは建築的に優れている、またユニークな建物を対象にしたのではない（もつとも結果的にはそういうことになったが）。あくまでそこに住んだ〈先賢〉の息吹をたずねたのである」と著者は「あとがき」で書いている。だが見渡したところ、これらの邸宅は建築的にはそれ程優れてもいないしユニークともいえない。そのほとんどのものはアノニマスでヴァナキュラーな「京の町家」の範ちゅうに属するものといって過言ではなかろう。だがそれでこそ「京が残す」先賢の住まいにふさわしいものといえるのではないか。こんなところで遺邸たちに、めいめいきわ立った独創性の競演をやられたのでは、「先賢の息吹」も何もあったものではあるまい。というよりは、おそらくそんな住まいには住みたくないというような人が〈先賢〉の過半数を占めていたのではないか。

本書の全体をとおして、私がややもの足りなく思うことは、一般にこうした遺邸の中での、或いは遺邸とのからみ合いにおける、先賢たちのナマの生きざまや心情などがいまいち伝わっ

て来ないことである。だが、この手のシリーズにそこまで求めるのは、やはり無理というもので、小紙面の中で、人と住まいとの板バサミになり、あっちが立てばこっちが立たずといった苦しさがたえず著者につきまとったことと思うが、ともかくその苦しさをのりこえてここまでまとめ上げられた努力は容易なことではなかったろう。これまでちょっと類例のない、ユニークで読物としても結構楽しめる好著として是非一読をおすすめしたい。

おわりに一言希望を申し上げるならば、折角150あまりもの対象をリストアップされたというからには、このままで終わってしまうのは何としても惜しい気がする。何とか残りの旧邸、遺邸についても、このシリーズの続きを実現してほしいものである。

(向井正也)